

つつじ読書会 サリンジャー(1919-2010)『ナイン・ストーリーズ』(1953)

山口

1.9つの物語

それぞれの物語の通奏低音 = 戦争の影

2.それぞれの物語に戦争(1939-1945)が影を落とす

(1) バナナフィッシュにうってつけの日

退役軍人のシーモアは自制力を失って「バナナフィッシュにうってつけの日」に拳銃自殺する。

(2) コネティカットのひょこひょこおじさん

戦争未亡人のエロイズ。ラモーナが語る架空の男の子、ジミーの死。

(3) 対エスキモー戦争の前夜

銃後のコンプレックス。セリーナの兄。

(4) 笑い男

コマンチ団団長が語る血生臭くもある「笑い男」の物語。奇形の、歪な、形だけの笑顔(戦勝国の隠喩?)。

(5) 小舟のほとりで

父親を「ユダ公」と蔑む陰口をきき、家出するライオネル。

(6) エズミに捧ぐ 愛と汚辱のうちに

曹長Xのエピソード。「すべての機能を無傷のままに戦争をくぐり抜けてきた青年ではなかった」

(7) 愛らしき口もと目は緑

もと軍隊にいたと思しき、アーサーというつねに疑心暗鬼な男との電話での会話。

(8) ド・ドミーエ=スミスの青の時代

シニカルなド・ドミーエ=スミスが「古典巨匠の友」で、絵を教える。聖ヨセフ修道会の修道女で、キリストの屍体(神は死んだの隠喩?)を描いたアーマに入れ込むが、勉学の許可が撤回される。太陽が現れる。

(9) テディ

輪廻を説くテディ。

3.サリンジャーの戦争の影

サリンジャーは第二次世界大戦に従軍しており、1945年春、ドイツ・ランツベルク、カウフェリンクIV強制収容所を訪れている。

デボラ・ダッシュ・ムーア そこに入った兵士のだれにとってもそうであったように、収容所の体験はサリンジャーにとっても不意打ちだった。あのおいと、積み重ねられた裸体の光景—すべて死体のように見えたが、ときどき音が聞こえてくることがあり、兵士たちは実はまだ生存者がいることに気付いていた。あまりにやせ細っているために、頬骨がまるで角のように突き出ている人々もいた。手首の骨も浮き出していた。皮膚はナイロンのストッキングのように体中で伸びきって、骨が透けて見えていた。彼らの経験は何も—サリンジャーはすでに経験豊富な兵士になっていて、それまでに恐ろしい戦いを幾度となくくぐり抜けてきていたが—この光景を前にしては役に立たなかった。

(デイヴィット・シールズ/シェーン・サレルノ 『サリンジャー』 p198 角川書店)

サリンジャーの物語に影を落とす戦争の内実は、近代の行き詰まりの極致のひとつだったといえる。

すなわち、価値観や考え方が異なる人々を排除する、絶滅させること。いまもってなお続いている事態(ロ

シア・ウクライナ戦争 2022.2～、ガザ危機 2023.10～)も、価値観や考え方が異なる人々と、どのように共生していくか、近代がまだ見い出せていないことを証し立てている。近代はルール(法)をつくった、しかし、ルール(法)とルール(法)が衝突したときのルール(法)は、まだ見い出せていない。交わることのないそれぞれの正義が、いずれかのルール(法)が絶滅するまで、修復不可能な禍根を残す。

サリンジャーは、いまからおよそ80年前に、この近代の行き詰まりの光景を目の当たりにし、その後、物語を紡いでいった。

4.戦勝国アメリカにおける戦争の影

日本は敗戦国であるがゆえに、戦争の影がよく見える。しかし、アメリカは戦勝国ゆえに、戦争の影は一見すると見えないようだが、しかし、むしろ日常のなかに、後ろ暗さや居心地の悪さとして瀰漫しているように『ナインストーリーズ』の物語から感じ取れる。

日常のなかに、後ろ暗さや居心地の悪さとして瀰漫

(1)は、戦場のルールに与した退役軍人が、日常に戻るも病んだ心のゆえか、拳銃自殺する。シーモアの居場所はもはや日常にはないかのようだ。穴に入ったら二度と外には出られなくなるバナナフィッシュのエピソードが、そこに重ねられるかもしれない。(2)は戦争によって失われ、空席となった場所(ウォルト)を埋め合わせる心の機微が、エロイズとラモーナを通して浮かび上がる。(3)は戦争に行かなかった者たちの、銃後の憧憬とコンプレックスが感じられる。たとえそれが偽物、必然性がなかったとしても、ある者にとっては切実であったことを物語る。(4)の「笑い男」は、戦勝国の奇形性そのものだ。その笑顔は無理矢理に歪められた、外形だけのものに過ぎない。(5)は戦後もなお続き、むしろありふれた日常のなかに浸潤した差別意識が少年の心に影を落とすさまを、(6)は戦争によって傷つけられた青年の姿を描く。(7)の電話口のアーサーもまた、戦争がによって心の病を患い、日常にその居場所をもてない者のようだ。(8)は戦争の描写はないが、「古典巨匠の友」でド・ドミーエ=スミスが見い出した、アーマが描いていたのは、キリストの屍体だった。これを「神は死んだ」の隠喩だとすると、ド・ドミーエ=スミスは時代に相応しい芸術家を見い出したといえる。そして絵を描くとは、神が死んだのちに、ふたたび人がどう生きるかということ = 世界をどのように描き出すか、という隠喩になる。が、この試みは失敗する。(9)は、この問題、ふたたび世界をどのように描き出すか、を引き継いで、これまでの世界とは異なる世界を語る少年の物語だ。

5.テディの方法

テディが語るこれまでの世界とは異なる世界とは何か?

オレンジの皮があそこにあるのをぼくが知ってるってことが面白いんだ。もしもぼくがあれを見なかったら、ぼくはあれがあそこにあることを知らないわけだ。そしてもしもあれがあそこにあることを知らなければ、そもそもオレンジの皮ってものが存在するということさえ言えなくなるはずだ。(p207)

ここには、自分がいかに限定された世界(=有限界)をのみ見ているか、という自覚が描かれている。すなわちテディが語るこれまでの世界とは異なる世界とは、あらゆる限定から世界を解き放つ方法だったといえる。

まず子供たちを全部集めて、みんなに瞑想の仕方を教えると思う。自分たちの単なる名前とかなんとか、そんなことじゃなくて、本当に自分は誰なのか、それを発見する方法を教えようとするだろうな…いや、それよりも前に、親やみんなから教え込まれたことを全部、頭の中からきれいさっぱりと吐き出させるね、きっと。たとえば、象は大きいと親から教えられていたとしても、そいつを吐き出さしちゃうんだ。象が大きい

のは、何か他のもの—犬とか女の人とか、そういったものと並べたときだけ言えることでね」テディはまたちょっと考えてから「ぼくなら象には長い鼻があるということだって教えないだろう。手もとに象がいたら、見せはするかもしれない。けれどそのときでも、子供たちを象のとこにただ行かせるだけだな。象が子供たちのことを知らないように、子供たちにも象のことを知らせないでおくね。草とか、そのほかの物もおんなじさ。草は緑なんてことさえぼくは教えない。色は名称にすぎないからね。つまり、もしも草は緑だと教えると、子供たちは初めから草をある特定の見方—教えたそのご当人の見方—で見るようになっちまう—ほかにも同じようによい見方、いやもっとはるかによい見方があるかもしれないのにさ…よく分かんないけどね。ぼくはただ、両親やみんなが子供たちにかじらしたりんごを、小さなかけらの果てまでそっくり吐き出さしてやりたいんだよ」

(p290)

すなわち、「ドイツ人」「ユダヤ人」などという名前、小賢しい分別こそが、分断や排除、絶滅、つまり戦争の原因だった。近代がつくったルール(法)が、「ドイツ人のルール(法)」、「ユダヤ人のルール(法)」に過ぎず、衝突するほかなく、いずれかを絶滅させることしかできないのであれば、そのようなルールはむしろ「吐き出さしちまう」べきだ。

「思いきって広く自分を開け放せばいいんだ」

冒頭に掲げられた禅の公案は、「片手のなる音」を、私たちが「知る」前に知っていることを告げる。両手が鳴っているのだから、片手はすでに鳴っているはずだから。逆さまにいうと、片手が鳴っていたことを私たちは忘れてる。「ドイツ人」や「ユダヤ人」である前に、私たちはすでに何人でもない「人」ではなかったか。それを思い出すことこそ、あらゆる限定から世界を解き放つ方法だ、とテディは教える。(遠藤周作(1923-1996)の『深い河』を想起せずにはいられない)

6.あらゆる限定から世界を解き放つ方法としての「死」

一方で、テディの結末は、不穏である。全てを無に帰する。バナナフィッシュにうってつけの日のシーモアの拳銃自殺と呼応するように、「死」を解放とすることに私はたじろぐ。

また、サリンジャーの短編には、物語になる手前で、物語になることをためらうような、分解された物語という印象が漂う。短編という形式は、恣意的になされたものではなく、物語を否定する(=物語の死)物語として、選びとられたものではないか。(ナイン・ストーリーズというタイトルの付し方も然り)物語として形を与えると、衝突が生じるから。

7.問いを開く

ナイン・ストーリーズに色濃く漂う「死」の気配。しかし、「生」はことほどさように抹香臭く、消極的なものなのか?伝記はサリンジャーが隠棲することを伝えている。

Fig.1 テディの方法

